

サムエル記第二19-21章 「王の帰還」

1A ダビデのエルサレム帰還 19

1B 悲しみからの立ち返り 1-8

2B 迎えに来る者たち 9-43

1C イスラエルとユダ 9-15

2C シムイ 16-23

3C メフィボシェテ 24-30

4C バルジライ 31-39

3B イスラエルとユダの仲たがい 41-43

2A 新たな分裂 20

1B 競争への便乗 1-2

2B 殺されるアマサ 3-13

3B 城の中での死 14-26

3A 晩年に向かうダビデ

1B 土地の贖い 1-14

2B 巨人との戦い 15-22

本文

サムエル記第二 19 章から読んでいきます。ダビデの息子アブシャロムが死にました。主が王を救ってくださった吉報を伝えにいったクシュ人の言葉によって、ダビデはアブシャロムが死んだことを知りました。すると、彼は身震いして門の屋上に上って、泣きわめきました。「すると王は身震いして、門の屋上に上り、そこで泣いた。彼は泣きながら、こう言い続けた。「わが子アブシャロム。わが子よ。わが子アブシャロム。ああ、私がおまえに代わって死ねばよかったのに。アブシャロム。わが子よ。わが子よ。(18:33)」この泣きわめきはずっと続きました。

1A ダビデのエルサレム帰還 19

1B 悲しみからの立ち返り 1-8

19:1 そうこうするうちに、ヨアブに、「今、王は泣いて、アブシャロムのために、喪に服しておられる。」という報告がされた。19:2 それで、この日の勝利は、すべての民の嘆きとなった。この日、民が、王がその子のために悲しんでいる、ということを知ったからである。19:3 民はその日、まるで戦場から逃げて恥じている民がこっそり帰るように、町にこっそり帰って来た。19:4 王は顔をおおい、大声で、「わが子アブシャロム。アブシャロムよ。わが子よ。わが子よ。」と叫んでいた。

ダビデがアブシャロムを嘆き悲しむことは、父親として当然のことでしょう。けれども、これは行きすぎです。悲しみの中にダビデのために命をかけて戦った部下たちが、まるで敗北したかのように

家に帰らなければいけません。ダビデはあまりにも悲しんでいるので、民がどのようになっているかを見失っていました。

愛する者の死のために悼み哀しむのは当たり前ですが、その中に沈んでしまうと、自分のことしか考えられなくなります。そして希望を失います。テサロニケの人々が、そのようになってしまっているのを使徒パウロは立ち上がらせようとしています。「眠った人々のことについては、兄弟たち、あなたがたに知らないでいてもらいたくありません。あなたがたが他の望みのない人々のように悲しみに沈むことのないためです。(1テサロニケ 4:13)」そして彼は先にキリストにあって眠った人たちは確かに復活し、キリストが天から来られる時にこの方にお会いできる希望を話しました。悲しみからの立ち上がりが必要です。

19:5 ヨアブは王の家に行き、王に言った。「あなたは、きょう、あなたのいのちと、あなたの息子、娘たちのいのち、それに、あなたの妻やそばめたちのいのちを救ったあなたの家来たち全部に、きょう、恥をかかせました。19:6 あなたは、あなたを憎む者を愛し、あなたを愛する者を憎まれるからです。あなたは、きょう、隊長たちも家来たちも、あなたにとっては取るに足りないことを明らかにされました。今、私は知りました。もしアブシャロムが生き、われわれがみな、きょう死んだのなら、あなたの目にかなったのでしょうか。19:7 それで今、立って外に行き、あなたの家来たちに、ねんごろに語ってください。私は主によって誓います。あなたが外においでにならなければ、今夜、だれひとりあなたのそばに、とどまらないでしょう。そうなれば、そのわざわいは、あなたの幼いころから今に至るまでにあなたに降りかかった、どんなわざわいよりもひどいでしょう。」

ヨアブは、アブシャロムを殺した張本人です。そのような無慈悲な男でしたが、しかし彼はダビデの国のことを思う愛国者でした。彼の言ったことは尤もでした。主がダビデを敵の手から救い出してくださいました。ダビデに忠誠を誓う家臣たちがいます。ダビデに神は恵みと憐れみを示してくださっています。だから彼は、その憐れみに応答して前に向かって進んでいかなければいけません。

思えば、後にエリヤという預言者が出てきます。彼はバアルの預言者を打ち殺した後に、イゼベルの一言の脅しによってシナイ山にまで逃げていきました。彼もダビデと同じように悲嘆にくれ、自分を殺してください、とまで主に訴えました。感情に支配されてしまったのです。私たちは感情を持つことは間違っていない。いや、主に関することで感情がないことのほうが問題です。けれども感情に捕われてはいけません。

19:8 それで、王は立って、門のところへすわった。人々がすべての民に、「見よ。王は門のところへすわっておられる。」と知らせたので、すべての民は、王の前にやって来た。一方、イスラエル人は、おのおの自分たちの天幕に逃げ帰っていた。

ダビデは、門のところに座りたくありませんでした。門のところに座るとするのは、王の務めを果たすことです。いつまでもアブシャロムの死を悲しみたかったのですが、その感情に抗して行動に移したのです。私たちは時にそのような気持ちでなくても、主にある責任を果たすことで、主がその感情をも支配してくださることを知り、体験する必要があります。

2B 迎えに来る者たち 9-43

1C イスラエルとユダ 9-15

19:9 民はみな、イスラエルの全部族の間で、こう言って争っていた。「王は敵の手から、われわれを救い出してくださった。王はわれわれをペリシテ人の手から助け出してくださった。ところが今、王はアブシャロムのために国外に逃げておられる。19:10 われわれが油をそそいで王としたアブシャロムは、戦いで死んでしまった。それなのに、あなたがたは今、王を連れ戻すために、なぜ何もしていないのか。」

アブシャロムに付いていったイスラエルの者たちは、自分たちで何をこれまでしてきたのかと気づき始めています。彼らが思い出したのは、長年、自分を支配し、抑圧してきたペリシテ人からの救いです。真の王は誰なのか、と自問していました。御霊によるリーダーは、このように人々に伝えてきたという実質があります。だから、人々が付いてきます。

19:11 ダビデ王は祭司ツアドクとエブヤタルに人をやって言させた。「ユダの長老たちにこう言って告げなさい。『全イスラエルの言っていることが、ここの家にいる王の耳に届いたのに、あなたがたは、なぜ王をその王宮に連れ戻すのをためらっているのか。19:12 あなたがたは、私の兄弟、私の骨肉だ。それなのに、なぜ王を連れ戻すのをためらっているのか。』

今ここでダビデは、イスラエルとユダを分けて話しています。ダビデはユダ族ですが、その他の部族がイスラエルと呼ばれています。ここでダビデは、ユダの者たち、またもちろんイスラエルの者たちから迎え入れられたいと願っています。しかもこのユダの者たちは、自分のところに付いてこなかった、アブシャロムに付いていった者たちです。けれども、ダビデはそんな過去を全く度外視して、すぐに彼らから迎え入れられたいと願っているのです。自分の王権を強いるのではなく、自発的に従ってほしいと願っているのです。

19:13 またアマサにも言わなければならない。『あなたは、私の骨肉ではないか。もしあなたが、ヨアブに代わってこれからいつまでも、私の将軍にならないなら、神がこの私を幾重にも罰せられるように。』

アマサは、アブシャロムに付いていき将軍として戦った者です。なんと彼に自分の将軍になることを願っています。以前、サウル家のイシュ・ボシェテの将軍アブネルを暖かく迎え入れた時と同じです。敵であった者を自分の家来の中に入れようという者です。ここにダビデの統治にある恵みと

平和があります。キリストにもある特長です。「ですから、信仰によって義と認められた私たちは、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。(ローマ 5:1)」神は罪によって敵対していた私たちを、一挙にキリストにある恵みによってご自分の味方としてくださいます。

そしてダビデは、ヨアブを降格させる意図もありました。ヨアブではなくアマサを自分の将軍にしようとしています。ヨアブは、あまりにも愛国心の強い、ダビデの恵みと平和を求める姿勢とは程遠い人間です。彼は、これを機会に彼を自分のところから引き離そうとしています。けれども、この試みは失敗します。

19:14 こうしてダビデは、すべてのユダの人々を、あたかもひとりの人の心のように自分になびかせた。ユダの人々は王のもとに人をやって、「あなたも、あなたの家来たちもみな、お帰りください。」と言った。19:15 そこで王は帰途につき、ヨルダン川に着くと、ユダの人々は、王を迎えてヨルダン川を渡らせるためにギルガルに来た。

「あたかもひとりの人の心のように」とあります。恵みによって御霊の一致が与えられます。パウロも教会の人々のよう勧めました。「さて、主の囚人である私はあなたがたに勧めます。召されたあなたがたは、その召しにふさわしく歩みなさい。謙遜と柔和の限りを尽くし、寛容を示し、愛をもって互いに忍び合い、平和のきずなで結ばれて御霊の一致を熱心に保ちなさい。(エペソ 4:1-3)」

ダビデはマハライムにいてエルサレムに戻ろうとしていますが、ヨルダン川で橋のないところを、水かさが低くなっているところを通して渡らないといけません。それを手助けするためにユダの人々がやって来ました。

2C シムイ 16-23

けれどもそのユダの人々に混じって、我先に迎えに来た人がいました。あの、ダビデを罵ったサウル家のシムイです。

19:16 バフリムの出のベニヤミン人、ゲラの子シムイは、ダビデ王を迎えようと、急いでユダの人々といっしょに下って来た。19:17 彼は千人のベニヤミン人を連れていた。サウル家の若い者ツイバも、十五人の息子、二十人のしもべを連れて、王が渡る前にヨルダン川に駆けつけた。

シムイだけでなく、あのツイバも駆けつけています。ツイバも危い立場にいます。メフィボシェテのことを偽って、ダビデからメフィボシェテの地所を譲り受けたのですから、そのことがばれることは必至だからです。

19:18 そして彼は、王の家族を渡らせるために渡しを渡って行き、王が喜ぶことをした。ゲラの子シムイも、ヨルダン川を渡って行って、王の前に倒れ伏して、19:19 王に行った。「わが君。どうか

私の咎を罰しないでください。王さまが、エルサレムから出て行かれた日に、このしもべが犯した咎を、思い出さないでください。王さま。心に留めないでください。19:20 このしもべは、自分の犯した罪を認めましたから、ご覧のとおり、きょう、ヨセフのすべての家に先立って、王さまを迎えに下ってまいりました。」

シムイは悔い改めと謙遜の姿勢を見せています。けれども、私は何かぎこちなさを感じます。彼はベニヤミン人千人を連れて来ています。そして自分のことを、「ヨセフのすべての家に先立って」と、一部族の者にしか過ぎないのにヨセフという、イスラエルの代表的部族よりも優れていることをアピールしています。そして、「罪を認めましたから」と言って、その赦しを押し付けているような感じで話しています。ダビデの悔い改めを思い出してください。彼は主からの裁きを甘んじて受けました。裁きを甘んじて受けて、それでもって神が自分を恵みによって顧みてくださるかもしれないと願いました。それとは違う態度をシムイは持っています。むしろサウル本人の態度と似ています。サムエルによって、「あなたは王位から退けられた」と宣言されて、それでようやく「罪を犯しました。けれども、民の手前、あなたと共に礼拝をささげさせてください。」と言ったのです。

19:21 ツェルヤの子アビシャイは口をはさんで言った。「シムイは、主に油そそがれた方をのろつたので、そのために死に値するのではありませんか。」19:22 しかしダビデは言った。「ツェルヤの子らよ。あれは私のことで、あなたがたには、かかわりのないことだ。あなたがたは、きょう、私に敵対しようとするのか。きょう、イスラエルのうちで、人が殺されてよいだろうか。私が、きょう、イスラエルの王であることを、私が知らないともいうのか。」19:23 そして王はシムイに、「あなたを殺さない。」と言って彼に誓った。

アビシャイは、シムイがダビデを呪った時にこれと同じ台詞を言っていました。そしてダビデもアビシャイに対して同じ台詞を言っていました。「これはあなたには関わりのないことだ」と。大事なものは、今、主が恵みをもって自分を救い出してくださった時に人を殺してはいけない、この恵みを見つめなければいけないといって、シムイを殺さないことを誓ったことです。私たちも、神の大いなる恵みの御業を見て、人々の細かい落ち度から目を離すという寛容さが必要です。

けれども、ダビデはシムイから完全に目を離していたわけではありません。果たして彼が、主の立てられた権威に従っていくのかどうかを、心のどこかで見張っていたと考えられます。なぜなら、彼の晩年に王となるソロモンに対して、彼を自然死によって陰府に下らせてはいけないと言いつけているからです。シムイが自分に示したあの態度は、自分の子ソロモンに対しても挑みかかると彼は見定めたからです。そしてソロモンは知恵を使って、シムイの反抗に対して死罰を与えます(1列王 2:39-46)。

3C メフィボシェテ 24-30

19:24 サウルの子メフィボシェテは、王を迎えに下って来た。彼は、王が出て行った日から無事に

帰って来た日まで、自分の足の手入れもせず、爪も切らず、ひげもそらず、着物も洗っていなかった。

この姿が悲しみを表しています。また、自分がエルサレムに留まっていたこと、アブシャロムの近くにいたことの不満を表しています。

19:25 彼が王を迎えにエルサレムから来たとき、王は彼に言った。「メフィボシェテよ。あなたはなぜ、私といっしょに来なかったのか。」19:26 彼は答えた。「王さま。私の家来が、私を欺いたのです。このしもべは『私のろばに鞍をつけ、それに乗って、王といっしょに行こう。』と思ったのです。しもべは足なえですから。19:27 ところが彼は、このしもべのことを、王さまに中傷しました。しかし、王さまは、神の使いのような方です。あなたのお気に召すようにしてください。19:28 私の父の家の者はみな、王さまから見れば、死刑に当たる者に過ぎなかったのですが、あなたは、このしもべをあなたの食卓で食事をする者のうちに入れてくださいました。ですから、この私に、どうして重ねて王さまに訴える権利がありましょう。」

メフィボシェテは、その態度が一貫していますね。彼は自分の正しさを訴えました。けれども、自分は死ぬも同然の存在であること、にもかかわらず王の食卓に着いていることへの感謝を表明しています。

19:29 王は彼に言った。「あなたはなぜ、自分の弁解をくり返しているのか。私は決めている。あなたとツィバとで、地所を分けなければならない。」19:30 メフィボシェテは王に言った。「王さまが無事に王宮に帰られて後なら、彼が全部でも取ってよいのです。」

ダビデは知恵によって、その地所をツィバとメフィボシェテの間で折半しました。おそらく、ツィバが中傷したことは確かにそうだけれども、一度約束したことを完全に反故にしたくなかったということがあるでしょう。さらに、ツィバが自分の地位に対して不満を持っていたことも、今回明らかにされました。メフィボシェテとツィバとの間に平和があるためにも、折半という判断を下したのだらうと思われまます。

4C バルジライ 31-39

19:31 ギルアデ人バルジライは、ログリムから下って、ヨルダン川で王を見送るために、王といっしょにヨルダン川まで進んで来た。19:32 バルジライは非常に年をとって八十八歳であった。彼は王がマハナウムにいる間、王を養っていた。彼は非常に富んでいたからである。

覚えていますか、ダビデたちがヨルダン川の東にあるギルアデ地方に逃げてきて、それからマハナウムに陣を張った時に、バルジライを始めとする何人かが食料や寝台などを持って来てくれました。彼は、ルカ伝にある愚かな金持ちとは違い、正しい目的のために富を用いている人です。愚

かな金持ちについて、イエス様は「自分のためにたくわえても、神の前に富まない者はこのとおりです。(12:21)」と言いました。

19:33 王はバルジライに言った。「私といっしょに渡って行ってください。エルサレムで私のもとであなたを養いたいのです。」19:34 バルジライは王に言った。「王といっしょにエルサレムへ上って行っても、私はあと何年生きられるでしょう。19:35 私は今、八十歳です。私はもう善悪をわきまえることができません。しもべは食べる物も飲む物も味わうことができません。歌う男や女の声を聞くことさえできません。どうして、このうえ、しもべが王さまの重荷になれましょう。19:36 このしもべは、王とともにヨルダン川を渡って、ほんの少しだけまいりましょう。それ以上、王はどうして、そのような報酬を、この私にしてくださらないければならないのでしょうか。19:37 このしもべを帰らせてください。私は自分の町で、私の父と母の墓の近くで死にたいのです。しかしここに、あなたのしもべキムハムがおります。彼が、王さまといっしょに渡ってまいります。どうか彼に、あなたの良いと思われることをなさってください。」

バルジライは、自分が高められることを意図してダビデを助けたのではありません。正義と憐れみによってダビデを助けたことが、ここにある態度から分かります。ツイバとは異なりますね。

19:38 王は言った。「キムハムは私といっしょに渡って来てよいのです。私は、あなたが良いと思うことを彼にしましょう。あなたが、私にしてもらいたいことは何でも、あなたにしてあげましょう。」19:39 こうして、みなはヨルダン川を渡った。王も渡った。それから、王はバルジライに口づけをして、彼を祝福した。バルジライは自分の町へ帰って行った。

キムハムはバルジライの息子です。ダビデの子ソロモンは、父の言いつけにしたがって、バルジライの子たちを自分の食事の席に着かせました(1列王 2:7)。メフィボシェテが王の食卓に連なったところでも話しましたが、これは光栄ある立場であり、王との交わりと王座を与えられていることを象徴しています。ラオデキヤにある教会に対してイエス様が与えられた約束がそれです。「見よ。わたしは、戸の外に立ってたたく。だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしは、彼のところにはいって、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。勝利を得る者を、わたしとともにわたしの座に着かせよう。それは、わたしが勝利を得て、わたしの父とともに父の御座に着いたのと同じである。(黙示 3:20-21)」

3B イスラエルとユダの仲たがい 41-43

19:40 王はギルガルへ進み、キムハムもいっしょに進んだ。ユダのすべての民とイスラエルの民の半分とが、王といっしょに進んだ。19:41 するとそこへ、イスラエルのすべての人が王のところにやって来て、王に言った。「われわれの兄弟、ユダの人々は、なぜ、あなたを奪い去り、王とその家族に、また王といっしょにダビデの部下たちに、ヨルダン川を渡らせたのですか。」19:42 ユダのすべての人々はイスラエルの人々に言い返した。「王は、われわれの身内だからだ。なぜ、この

ことでそんなに怒るのか。いったい、われわれが王の食物を食べたとでもいうのか。王が何かわれわれに贈り物をしたとでもいうのか。」19:43 イスラエルの人々はユダの人々に答えて言った。「われわれは、王に十の分け前を持っている。だからダビデにも、あなたがたよりも多くを持っているはずだ。それなのに、なぜ、われわれをないがしろにするのか。われわれの王を連れ戻そうと最初に言いだしたのは、われわれではないか。」しかし、ユダの人々のことばは、イスラエルの人々のことばより激しかった。

あら、つい先ほどまで彼らはダビデに逆らって、アブシャロムに付いてきたのに、今度はいかに自分たちがダビデに気に入られるか、その主導権を得るために競争しています。これは、いかに自分が王に尽くしているかを示しているようで、実は自分自身を求めているしか過ぎません。ピリピにある教会に対してパウロが手紙を書いた時も、熱心な教会の姉妹たちが競争をしていました。パウロは、「主にあって一致してください(4:2)」とお願いすると同時に、教会すべての人たちにある問題を指摘しています。「だれもみな自分自身のことを求めるだけで、キリスト・イエスのことを求めてはいません。(2:21)」王なるキリストに服しているのではなく、自分自身を求めているので競争になってしまっているのです。

この対立は、ダビデの子ソロモンの死後に決定的となります。ヤロブアムがイスラエル十部族を引き連れて、そこで王と宣言されます。レハブアムはそのままユダの王であり続けました。北イスラエル王国と南ユダ王国に分裂したのです。

2A 新たな分裂 20

そしてこのような競争が神の共同体の中で起こっている時に、悪魔がつけ入ります。ダビデ王国ではシェバという、よこしまな者が現れました。

1B 競争への便乗 1-2

20:1 たまたまそこに、よこしまな者で、名をシェバという者がいた。彼はベニヤミン人ビクリの子であった。彼は角笛を吹き鳴らして言った。「ダビデには、われわれのための割り当て地がない。エッサイの子には、われわれのためのゆずりの地がない。イスラエルよ。おのおの自分の天幕に帰れ。」20:2 そのため、すべてのイスラエル人は、ダビデから離れて、ビクリの子シェバに従って行った。しかし、ユダの人々はヨルダン川からエルサレムまで、自分たちの王につき従って行った。

「よこしまな者」の直訳は、「ベリアルの子」という意味で「悪魔の子」であります。まさに悪魔の仕業ですね。シェバはイスラエルに対して、ダビデが自分の同胞だけに分け前を与える依怙鼻息をしているのだ、自分たちのことは構わないのだ、と彼らの不満を焚きつけました。ダビデはこれを、アブシャロムよりもさらに危機的な状況だと見ています。イスラエルとユダの分裂が実質的に起こってしまうだろうと彼はみなしました。

2B 殺されるアマサ 3-13

20:3 ダビデはエルサレムの自分の王宮にはいった。王は、王宮の留守番に残しておいた十人のそばめをとり、監視つきの家を与えて養ったが、王は彼女たちのところには通わなかった。それで彼女たちは、一生、やもめとなって、死ぬ日まで閉じ込められていた。

ダビデがユダ族の者たちに迎え入れられて、エルサレムに到着しました。王宮に入ると、留守番のために残しておいた十人の側めがいました。彼女たちはがんじがらめの状態に入りました。なぜか？まず、彼女たちがアブシャロムと寝たのは彼女たちの意志によるものではありません。ですから彼女たちは姦淫の罪で死刑に処せられることはありません。けれども、彼女はアブシャロムに汚されました。したがってダビデは彼女のところに入ることができなくなりました。けれども、他の男の妻に与えるという選択肢もできません。王の妻であった者と結びつくことは、その男が王権に対して挑みかかる危険があったからです。どこにも解決の見いだされない彼女たちを、ダビデは仕方がなく、監視付きの家に置いておくことしかできなくなったのです。このように人の罪は、その被害を受ける人々がこのように出てくるということです。

20:4 さて、王はアマサに言った。「私のために、ユダの人々を三日のうちに召集し、あなたも、ここに帰って来なさい。」20:5 そこでアマサは、ユダの人々を召集するために出て行ったが、指定された期限に間に合わなかった。20:6 ダビデはアビシャイに言った。「今や、ビクリの子シェバは、アブシャロムよりも、もっとひどいわざわいを、われわれにしかけるに違いない。あなたは、私の家来を引き連れて彼を追いなさい。でないと彼は城壁のある町にはいつて、のがれてしまうだろう。」

ダビデはアマサをすでに将軍に立てています。けれども彼は、今、スピードが要求されるユダの人々の召集を三日のうちに済ますことはできませんでした。實力だけを考えると、アマサよりヨアブのほうが優れているようです。シェバが籠城すると彼を捕えることはできません。そこで部下のアビシャイに命じます。

20:7 それで、ヨアブの部下と、ケレテ人と、ペレテ人と、すべての勇士たちとは、アビシャイのあとに続いて出て行った。彼らはエルサレムを出て、ビクリの子シェバのあとを追った。

ヨアブは降格されています。アビシャイはヨアブの下にいましたが、今は立場が反対です。

20:8 彼らがギブオンにある大きな石のそばに来たとき、アマサが彼らの前にやって来た。ヨアブは自分のよろいを身に着け、さやに納めた剣を腰の上に帯で結びつけていた。彼が進み出ると、剣が落ちた。

アマサが、ギブオン人の住むところで、アビシャイたちに追いつくことができました。彼は三日のうちにユダの人々を召集させることができませんでした。共に戦いたかったのでしょうか、付いてきま

した。ところがヨアブが、またもや無慈悲なことをしでかします。

20:9 ヨアブはアマサに、「兄弟。おまえは元気か。」と言って、アマサに口づけしようとして、右手でアマサのひげをつかんだ。20:10 アマサはヨアブの手にある剣に気をつけていなかった。ヨアブが彼の下腹を刺したので、はらわたが地面に流れ出た。この一突きでアマサは死んだ。それからヨアブとその兄弟アビシャイは、ビクリの子シェバのあとを追った。

ヨアブはアマサの従兄弟です。そして友好の印として髭をつかんでいます。口づけする時につかみます。しかも剣を地面に落としているので、危険はないというしぐさまでしてみせています。そして不意打ちをくらわせたのです。この恐ろしいほどのライバル意識と、そして少しでも忠誠に対して疑いのあるものは抹殺するという無慈悲は、かつてイシュ・ボシェテの将軍アブネルに対しても見せました。

20:11 そのとき、ヨアブに仕える若い者のひとりがアマサのそばに立って言った。「ヨアブにつく者、ダビデに味方する者は、ヨアブに従え。」20:12 アマサは大路の真中で、血まみれになってころがっていた。この若い者は、民がみな立ち止まるのを見て、アマサを大路から野原に運んだ。そのかたわらを通る者がみな、立ち止まるのを見ると、彼の上に着物を掛けた。20:13 アマサが大路から移されると、みなヨアブのあとについて進み、ビクリの子シェバを追った。

かなりむごたらしい光景です。そしてダビデはアビシャイに命じたのに、この時点で再びヨアブが従っていません。自分が指揮を取っています。そして彼には実力がありましたから、他の者たちも自然に付いていっています。

3B 城の中での死 14-26

20:14 シェバはイスラエルの全部族のうちを通って、アベル・ベテ・マアカへ行った。すべてのベリ人は集まって来て、彼に従った。

アベル・ベテ・マアカは、ガリラヤ湖の北にある町だそうです。かなり北上しています。そしてダビデが最も恐れていた、城壁のある町の中にシェバが逃れてしまいます。けれども、主が彼をそこから引き出してくださいませ。

20:15 しかし、人々はアベル・ベテ・マアカに来て、彼を包囲し、この町に向かって壘を築いた。それは外壁に向かって立てられた。ヨアブにつく民はみな、城壁を破壊して倒そうとしていた。20:16 そのとき、この町から、ひとりの知恵のある女が叫んだ。「聞いてください。聞いてください。ヨアブにこう言ってください。ここまで近づいてください。あなたにお話したいのです。」

知恵のある女が出てきました。サムエル記には知恵のある女が結構でてきますね。ダビデの妻

となったアビガイル、そしてアブシャロムをエルサレムに引き戻すべく、ヨアブに言いつけられてダビデの前に出たテコアの女がいました。今彼女は、城壁の上から叫んでいます。会話ができるように近づいてくれ、と頼んでいます。

20:17 ヨアブが彼女のほうに近づくと、この女は、「あなたがヨアブですか。」と尋ねた。彼は答えた。「そうだ。」すると女は言った。「このはしためのことばを聞いてください。」彼は答えた。「私が聞こう。」20:18 すると女はこう言った。「昔、人々は『アベルで尋ねてみなければならぬ。』と言って、事を決めるのがならわしでした。20:19 私は、イスラエルのうちで平和な、忠実な者のひとりです。あなたは、イスラエルの母である町を滅ぼそうとしておられます。あなたはなぜ、主のゆずりの地を、のみ尽くそうとされるのですか。」

この町は知恵のあることで有名なところである、そしてイスラエルの母のような昔からの町である、と訴えています。そして事実そのような知恵のある者たちがいることが次に証明されます。

20:20 ヨアブは答えて言った。「絶対にそんなことはない。のみ尽くしたり、滅ぼしたりするなど、とてもできないことだ。20:21 そうではない。実はビクリの子で、その名をシェバというエフライムの山地の出の男が、ダビデ王にそむいたのだ。この男だけを引き渡してくれたら、私はこの町から引き揚げよう。」するとこの女はヨアブに言った。「では、その男の首を城壁の上からあなたのところに投げ落としてごらんにいれます。」20:22 この女はその知恵を用いてすべての民のところに行った。それで彼らはビクリの子シェバの首をはね、それをヨアブのもとに投げた。ヨアブが角笛を吹き鳴らしたので、人々は町から散って行って、めいめい自分の天幕へ帰った。ヨアブはエルサレムの王のところに戻った。

有能な軍人ヨアブと、知恵のある女のこの会話はすごいです。しなければいけない仕事をすばやく終わらせる、回り道はしない、という感じですね。

20:23 さて、ヨアブはイスラエルの全軍の長であった。エホヤダの子ベナヤはケレテ人とペレテ人の長。20:24 アドラムは役務長官。アヒルデの子ヨシャパテは参議。20:25 シェワは書記。ツァドクとエブヤタルは祭司。20:26 ヤイル人イラムもダビデの祭司であった。

再びヨアブがイスラエル全軍の長となりました。これが終わるのが、ダビデが死んだ直後、ソロモンが王となってからです。ダビデが活着している時にできなかったこと、正義の執行をソロモンの王位を確立するためにも行っていかせます。

3A 晩年に向かうダビデ

そして話は、ダビデの治世の後期になります。アブシャロムの反抗もなくなり、シェバによる分裂も収まり、イスラエルは安定しているように見えたが、神はダビデがしなければいけない仕事

を示されます。

1B 土地の贖い 1-14

21:1 ダビデの時代に、三年間引き続いてききんがあった。そこでダビデが主のみこころを伺うと、主は仰せられた。「サウルとその一族に、血を流した罪がある。彼がギブオン人たちを殺したからだ。」

午前礼拝でお話ししましたように、飢饉はイスラエルにおいては、神が約束の地に対する呪いとして与えられる一つの徴です。「またあなたの頭の上の天は青銅となり、あなたの下の地は鉄となる。主は、あなたの地の雨をほこりとされる。それで砂ほこりが天から降って来て、ついにはあなたは根絶やしにされる。(申命記 28:23-24)」それで、ダビデは主が何に対して自分たちが背いているのかを知らせてほしいと思って伺いを立てました。ダビデの祈りの中で有名なのは、自分のうちに傷ついた道がないかを調べてください、というものがあります。「神よ。私を探り、私の心を知ってください。私を調べ、私の思い煩いを知ってください。私のうちに傷のついた道があるか、ないかを見て、私をとこしえの道に導いてください。(詩篇 139:23-24)」

そして、流血の罪があることを示されました。これも具体的に主がイスラエルの地であってはならないこととして警告しておられました。「あなたがたは、自分たちのいる土地を汚してはならない。血は土地を汚すからである。土地に流された血についてその土地を贖うには、その土地に血を流させた者の血による以外はない。(民数記 35:33)」

21:2 そこで王はギブオン人たちを呼び出して、彼らに言った。・・ギブオンの人たちはイスラエル人ではなく、エモリ人の生き残りであって、イスラエル人は、彼らと盟約を結んでいたのであるが、サウルが、イスラエルとユダの人々への熱心のあまり、彼らを打ち殺してしまおうとしたのであった。・・

パウロがイエスを信じないユダヤ教徒について、「私は、彼らが神に対して熱心であることをあかしします。しかし、その熱心は知識に基づくものではありません。(ローマ 10:2)」と言いました。サウルとダビデの違いは、ダビデは憤り深く、思慮深かったことということです。主が何をなされているのかを謙虚に見つめ、御心を求めました。サウルは、熱心であることが良いことだと考えていましたが、主の御言葉についての思慮深さに欠けていました。

21:3 ダビデはギブオン人たちに言った。「あなたがたのために、私は何をしなければならないのか。私が何を償ったら、あなたがたは主のゆずりの地を祝福できるのか。」

ダビデはイスラエルの王として、サウルのしたことに代わって主の前で償いをしたいと願いました。特に先に引用したように、加害者自身が血を流すことによって、初めてイスラエルの土地が贖わ

れるという御言葉があります。そしてダビデはギブオン人たちに、罪の償いを勝手に行ったのではなく、彼らに尋ねています。和解のために、自分自身が譲る立場を取っています。

21:4 ギブオン人たちは彼に言った。「私たちとサウル、およびその一族との間の問題は、銀や金のことではありません。また私たちがイスラエルのうちで、人を殺すことでもありません。」そこでダビデが言った。「それでは私があなたがたに何をしたらよいと言うのか。」21:5 彼らは王に言った。「私たちが絶ち滅ぼそうとした者、私たちが滅ぼしてイスラエルの領土のどこにも、おらせないようにたくらんだ者、21:6 その者の子ども七人を、私たちに引き渡してください。私たちは、主の選ばれたサウルのギブアで、主のために、彼らをさらし者にします。」王は言った。「引き渡そう。」

午前礼拝で話しましたが、これはギブオン人が主にあって正義を行ないたいという表れであります。主がサウルを選ばれたギブアにおいて、七人という完全数による息子の死によって、すでに死んでしまったサウルの代わりとして死にます。

21:7 しかし王は、サウルの子ヨナタンの子メフィボシェテを惜しんだ。それは、ダビデとサウルの子ヨナタンとの間で主に誓った誓いのためであった。21:8 王は、アヤの娘リツパがサウルに産んだふたりの子アルモニとメフィボシェテ、それに、サウルの娘メラブがメホラ人バルジライの子アデリエルに産んだ五人の子を取って、21:9 彼らをギブオン人の手に渡した。それで彼らは、この者たちを山の上で主の前に、さらし者にした。これら七人はいっしょに殺された。彼らは、刈り入れ時の初め、大麦の刈り入れの始まったころ、死刑に処せられた。

大麦の刈り入れは、他の作物の刈り入れの中でももっとも早い時期のもので、四月の初めの頃であり、まさに過越の祭りの三日目が初穂の祭りで、大麦の初穂を主に捧げるためのものです。

21:10 アヤの娘リツパは、荒布を脱いで、それを岩の上に敷いてすわり、刈り入れの始まりから雨が天から彼らの上に降るときまで、昼には空の鳥が、夜には野の獣が死体に近寄らないようにした。

リツパが行なったことは立派でした。彼らがさらされていることは、主の前における身代わりの死であることを彼女はよく知っていました。だから、彼らの上に雨の降る時までそれを彼女は行ったのです。そしてまた、鳥獣に死体が食われることは、当時の価値観では最も卑しめられた行為です。神は裁きとして、死体を猛禽に食わせることを行なわせるのは、例えば黙示録 19 章で、キリストに対して戦った軍隊の肉を猛禽が食べる姿が描かれています。

21:11 サウルのそばめアヤの娘リツパのしたことはダビデに知らされた。21:12 すると、ダビデは行って、サウルの骨とその子ヨナタンの骨を、ヤベシュ・ギルアデの者たちのところから取って来た。

これは、ペリシテ人がサウルをギルボアで殺した日に、ペリシテ人が彼らをさらしたベテ・シャンの広場から、彼らが盗んで行ったものであった。21:13 ダビデがサウルの骨とその子ヨナタンの骨をそこから携えて上ると、人々は、さらし者にされた者たちの骨を集めた。21:14 こうして、彼らはサウルとその子ヨナタンの骨を、ベニヤミンの地のツェラにあるサウルの父キシユの墓に葬り、すべて王が命じたとおりにした。その後、神はこの国の祈りに心を動かされた。

ダビデはリツパの姿を見て、一つ心が痛むことがありました。それは、サウル家の者たちが尊厳をもって葬られていないことを思い出したのです。ペリシテ人によって、サウルとヨナタン自身もさらし者にされていたのです。それを、勇気をもってヤベシュ・ギルアデの人たちが盗み取りました。けれども、彼らの骨は保管されていても墓に葬られていませんでした。そこでサウル家への尊敬を示すために、サウルとヨナタン、そして今回殺された息子たちの骨を、サウルの父の墓に丁重に葬ったのです。

このようにして、神に与えられた良心にしたがって動いた行為は、神の心を動かしました。飢饉を終わらせてほしいという彼らの祈りを神は聞かれたのです。時に祈りが聞かれないのは、私たちのうちに不義があるから、というのがあります。「もしも私の心にいただく不義があるなら、主は聞き入れてくださらない。(詩篇 66:18)」

2B 巨人との戦い 15-22

そして次に、巨人との戦いの記録があります。かつて少年ダビデがゴリヤテと戦いましたが、今はダビデの部下たちが戦っています。

21:15 ペリシテ人はまた、イスラエルに戦いをしかけた。ダビデは自分の家来たちを連れて下り、ペリシテ人と戦ったが、ダビデは疲れていた。21:16 それで、ラファの子孫のひとりであったイシュビ・ベノブは、ダビデを殺そうと考えた。彼の槍の重さは青銅で三百シェケル。そして彼は新しい剣を帯びていた。

「ラファ」とは巨人のことです。青銅の三百シェケルは、約 3.9 キロです。ゴリヤテを思い浮かべます。

21:17 しかし、ツェルヤの子アビシャイはダビデを助け、このペリシテ人を打ち殺した。そのとき、ダビデの部下たちは彼に誓って言った。「あなたは、もうこれから、われわれといっしょに、戦いに出ないでください。あなたがイスラエルのともしびを消さないために。」

もうダビデは、戦えるような体力を持っていませんでした。それだけ年老いていました。

21:18 その後、ゴブでまたペリシテ人との戦いがあり、そのとき、フシャ人シベカイは、ラファの子

孫のサフを打ち殺した。21:19 ゴブでまたペリシテ人との戦いがあつたとき、ベツレヘム人ヤイルの子エルハナンは、ガテ人ゴリヤテの兄弟ラフミを打ち殺した。ラフミの槍の柄は、機織りの巻き棒のようであつた。

ゴリヤテの兄弟が出て来ています。彼をダビデの部下、また同じベツレヘム人エルハナンが打ち殺しています。

21:20 さらにガテで戦いがあつたとき、そこに、手の指、足の指が六本ずつで、合計二十四本指の闘士がいた。彼もまた、ラファの子孫であつた。21:21 彼はイスラエルをそしたが、ダビデの兄弟シムアの子ヨナタンが彼を打ち殺した。21:22 これら四人はガテのラファの子孫で、ダビデとその家来たちの手にかかつて倒れた。

このような巨人がいたことは、骨の発掘などで知られています。「巨人症」にかかつていた、とも言われています。いずれにしても、大事なのは、あの神のための戦い、ダビデがゴリヤテに対して戦つたことは、しっかりと部下たちに伝わっているということです。彼らは今、ダビデの成し遂げた偉業をきちんと受け継いでいるということでもあります。これでダビデがいなくなっても、イスラエルの国はその精神を基盤として確立できます。このようにできたら、教会は理想状態です。指導者が神に立てられるだけでなく、受け継ぐ人がいるということです。パウロはテモテに、「多くの証人の前で私から聞いたことを、他の人にも教える力のある忠実な人たちにゆだねなさい。(2テモテ 2:2)」と言いました。

今回はサムエル記第二の最後になります。ダビデの歌つた歌、また彼が最後に行なつたことについて見ていくことができます。